

六 自らなる自己の表現

来て告ぐる人なかりせば衣手に、かゝる玉をも知らずやありけん

白樂天も危いと注意せられ、知ることは出来ても行ふことは難いと誠められて、ハツと危い弱い自分と云ふものに氣付き、進んで法を求むるに至つたのである。以上の如く我々は何時も、自己と云ふものを忘れ勝ちである。自己の真相を究明することは、何時も怠慢しながら、知らず識らず、その自己が相を現はし、勝手を定め込んで居るのを氣付かない。否之が尙自己を知らないと云ふものであらう。

或る面師が熱心に面を彫つて居る處へ、友人がやつて来て「君は大變凄い顔をして居る」と云うて行つた。面師はこの言葉を何とも思はずに聞いてゐた。其後かの友がまたやつて来た。彼は同じく面師の顔を見て「今日は大變善い顔をしてゐるな」と云つて呉れた。面師は此の時考へた。云何して日によつて己の顔に相違があるのだらう。熟々思ふてみると不思議である。先日は般若の鬼面を彫つて居た。ところが面師の顔が凄く成つて居ると友が云ふた。而して今度は丁度、惠比須大黒の福面を彫りつゝある時であつた。面師は此事に氣付いて尠からず驚いたさうである。私共の本性は毎日何を彫つて居るのであらうか。地獄でないか、餓鬼でないか、畜生でないか。

越前の吉崎は蓮如上人の御舊跡地である。彼處には「嫁嚇の面」といふのが遣つて居る。或は「肉つきの面」とも云はれて居る。婆さんは大の佛法嫌ひで、嫁は至つての信者であつた。嫁が吉崎へ參詣するのを忌々しく思ふて、或晚歸つて来る途中で威してやらうと考へた。鹿島明神の神殿にかゝつてある般若面を借用して、鬼の姿になつて躰から嫁を呼んだ。嫁は驚いたが、如來様が在ますと思ふたら、心丈夫になつて念佛しつゝ我家へ急いだ。歸つて

見ると婆さんが居ない。家は眞暗である。燈火をつけなければ室の隅に何か跪つてゐる。耳を澄せば泣聲がする。近寄つてみれば、婆さんが面がとれないと云うて泣いて居る。先程の鬼の正體は是かと思へば、却て氣の毒な。云何しても取れぬ。夜が明けたら困ると婆さんは益々泣く、神様の罰か佛様の御方便かに相違ないと、嫁は婆さんの手を引いて蓮如上人の所へ參つた。御前へ出て婆さんが廻心懺悔した處が、面がポロリと取れた。顔の皮が剥けて面にくつついたと云ふので「肉つきの面」と申し傳へて居る。何だか變な造り話のやうに聞える。けれども或人は之を斯う云ふ風に解釋した。味ふべき事と思ふ。初め婆さんが面を被つた時は、威してやらうと思ふ恐しい鬼の心があつたから、之が顔に現れて般若面と相應じ、コボリ填つて取れなくなつたであらう。後に蓮如上人の所へ行つて懺悔の涙を零した時、恐しい心が折れて佛心になつたから、もう面とは合致なくなつて、ポロリと取れたのだらうと戲言の様だが面白い。